海外の教員生活

トロント大学 名誉教授
西里静彦（にしさと　しずひこ）

1961 年，北海道大学大学院文学研究科修士課程修了。1966 年，Ph.D（ノースカロライナ大学）。マッギル大学で研究員，トロント大学，オンタリオ教育大学院大学で准教授，教授を歴任。著書は『行動科学のためのデータ解析』（単著，培風館），など，和書 5 冊，英書 6 冊。

1961 年 3 月，岩本隆茂，今井四郎と私は北海道大学大学院文学研究科心理学専攻の博士課程（現・人間システム科学専攻心理システム科学専修博士後期課程）を志望しましたが，定員は 1 名。結局，岩本が博士課程に，今井はジョンズホプキンス大学に，私はノースカロライナ大学に留学ということで事態は解消しました。

その年の 9 月初旬，私はノースウエストのプロペラ機で羽田空港を出発しました。すると偶然，隣席の若い日本女性が「私はシアトルの大学で講師をしています」とのこと。彼女のこの一言は「これが日本の見納めか」と悲嘆にくれていた私には信じられない全く別の世界で，彼女が突然神々しく見えました。── それから 50 年，私も海外での教師の生活を終え，いまは隠居生活，短いようで長い外国生活でした。ここに教員生活の一端を披露しましょう。

最初の赴任先，マッギル大学にて

留学先のノースカロライナ大学では，専攻は計量心理学，副専攻は数学でした。1965 年 9 月，博士論文の口述諮問が終わって帰国するも就職できず，さらにフルブライトの規則により 2 年間はアメリカへの復帰が不可能となり，結局カナダのマッギル大学に就職。マッギルには ヘッブ，ビンドラ，ファーガソン，ウエブスター，ランバート，マルモ，メルザック，ミルナー，ポーザー，ダグラス，スターン，ブレグマン，中島信舟，コーバリス，トラウブ，ドンデリほか，そして心理以外では ペンフィールドがいました。職務は「モティベーション」のビンドラと「バイリンガル研究」のランバートのプロジェクト，講義「計量心理学」，精神医学部統計コンサルタントを兼ねたリサーチアソシエイトでした。

フランス語圏にあるモントリオールのマッギル大学は英語系の大学で，学生は試験のときフランス語で答案を書くことは許されましたが，講義は英語です。しかし英語で講義する自信はありません。どうしよう？　4 年間の学生生活を英語で過ごしましたが，教える立場には責任が伴います。「いまさら心配しても手遅れ。おかしな発音は気にせず，大きな声で話そう」と決心しました。最新の計量心理学を紹介した教科書が無かったので講義のノートを学生用に準備し，毎回 5 ～ 10 ページを配布。その準備に人一倍時間をかけたおかげで，講義は意外にも滞りなく進み，学生も宿題を一生懸命やってくれました。後年，マッギル大学に私と同じくノースカロライナ大学を卒業後赴任した，今や計量心理学の第一人者高根芳雄氏に関して，ラムゼイ教授が「あれほど講義の準備に時間をかける人は見たことがない」と述懐していたのを思い出します。

トロント大学 OISE への赴任

カナダが建国されてちょうど百年目にあたる，モントリオール万博が開催された 1967 年に，トロント大学の教育学部の院生を擁する政府てこ入れの新設の OISE（Ontario Institute for Studies in Education）から誘いがあり，教官 20 数名の測定評価学部に助教授（Assistant Professor）として赴任しました。当時はベトナム戦争で徴兵逃れのアメリカ人がカナダに渡った時期で，ここもアメリカ人をはじめ外国人教師が大半，授業料はアメリカの大学院よりはるかに安く，留学生の天国でもありました。全日制の学生と夜間の学生の総数は 2 千人余，講義の大半は夕刻からで，教室で授業中の夕食が許されました。年配の学生が多数で，私の最初の論文指導は 60 歳を超えた，もと校長。皆は私をアメリカ以来の愛称で「ニシ」と呼び，アジア諸国からの学生だけは「プロフェサー ニシ」，「ドクター ニシ」と呼んでくれました。

OISE の講義は学生が評価表を記入し，結果は教官の昇給・昇格の参考資料として用いられました。学生の宿題・レポートは筆記の時代で，教官は学期が終わる頃までに各学生の筆記体を判別できるようになり，「この学生は愛想が良いのに批判が辛らつだ」とか「出来の悪い学生が学ぶところはなかったとは何事か」など，よく教官のあいだで語られました。学生は率直だったのです。ここでも講義ノートを学生配布用に準備し，毎朝 7 時半の出勤から夕刻 5 時半の講義までをそれにあてました。

チェアマンの苦労

准教授（Associate Professor）に昇格した 2 年後の 1971 年，私

は測定評価学部のチェアマンに選ばれました。任期は1976年までの5年間。学生と数名の教官の勧めで出馬したものの，いざ選ばれたときは後悔がちらつきました。当時は教育テストの最盛期で，わが学部もテスト開発からオンタリオ州の小・中・高校の州政府指定テストの得点解析を一手に引き受けていました。採点の誤り，報告期限の遅れ，結果の解釈など，校長や教頭からチェアマンへの苦情と問い合わせは絶えなく，毎日必ず数通の手紙を書く日が始まりました。最初はマッギル時代にビンドラ教授の編集助手をした家内ロレーンに助けを求めましたが，問題は手紙書きだけではありません。当時，教官の給料はチェアマンが決め，差別をつけないと学長から苦情が来るということで，5年間で何人もの敵を作りました。私は相変わらず学部でいちばん早い出勤，入口で電気のスイッチを入れて毎日が始まりました。その頃，学生の講義の評価表に「この教官の英語はわかりやすいか?」という外国人教師には大変嫌な質問が加わり，「外国人教師追放」の声が出はじめました。それは私が日本の国籍を放棄し，カナダの市民権を取った頃でした。

若くしてチェアマンという管理職に就くことは，研究者にとって致命傷であり，絶対，奨励できません。たくさんの会議と事務の重荷で，自分の研究時間はわずか朝5時から7時までの2時間弱。今日では大学の教官への期待は変わりましたが，その当時北米では「ジャーナルに出版か，首か」（Publish or perish）が大学の合言葉で，昇格・昇給の決定因はもっぱらリサーチアウトプット。「上に立つ者はリサーチでも」が常に念頭にありました。5年間の重荷に対し，掛替えのない収穫のひとつは英語で手紙や論文を書くことが苦痛でなくなったことでした。これは運命が恵んでくれた英語の人生「活性化」でした。チェアマンの任期の終わる前年に教授（Professor）に昇格，そのとき40歳。その後「応用コンピューター学部」と交渉して，計量心理学では有名になった学部「測定評価応用コンピューター学部 （MECA）」発足の準備を完了し，チェアマンの任期を終えました。

日本からの留学生を迎えて

その頃，学生の論文分野は因子分析（マクドナルド），テスト理論（トラウブ），スケーリング（西里），統計（バルガバ）に分かれ，私も1976年から自分の研究に専念し，研究の全ては数量化理論「双対尺度法」（Nishisato, 1980 ; 1994 ; 2007）に向けられました。およそ30年間，大学院で双対尺度法の入門と最新の発展を教えることができたことは幸い中の幸いです。その間，優秀な日本からの留学生（鳥居征彦，犬飼幸男，山内弘継，石塚智一，立木茂雄ほか），そして客員の諸氏（斉藤尭幸，馬場康維，山田文康，山内弘継，辻本英夫，柴田満）も学部の活性化に大いに貢献してくれました。

日本からの研究者には必ず学部のセミナーで研究発表をというのが私の方針で，時には私の前で何回もリハーサルをしてもらい，英語を直してからセミナーに臨んだものです。セミナーで大拍手をうけ，にこっと大きな笑顔を見せたあと外に飛び出した山田文康氏は，戻ってきて「これほどタバコがうまかったことはない」と述懐しました。カナダでは早くから禁煙の運動があり，大学の建物内の禁煙は1970年代から実施され，真冬には何人もの喫煙者が屋外でオーバー，マフラーに首をちじめ，震えながらの喫煙でした。

英語を習得するためには

次は英語生活に関する若干の感想です。日本から来たある留学生が「英語は60パーセント位わかるようになりました」と言いましたが，それではまだあまりわかっていないはず。また「聞くのはわかるが話せない」もあてになりません。もっと進歩が必要です。一般に日本人は英語が苦手だといいますが，それはスペイン人でもタイ人でも同じことです。英語圏にあるトロントでは公用語のフランス語を小学校1年から教えますが，大人になって流暢にフランス語を話す人は何人いるでしょうか。それほど語学は難しいもので，頑張る覚悟が必要だと思います。

また，多くの日本人は英語を話すとき声が小さく聞き取れない部分のある会話をしますが，これでは相手にはわかってもらえません。日本人が話すとき，対話中によく首を前に出して聞こうとする相手がいますが，それは聞こえないからで，その時は声を大きくしてください。単語を最後まで発音しきらない人もいます。特に「言葉の最後に来る“n”が軽すぎて飛び跳ねる感じがする」と，家内は昔，私の英語を批判しました。ステイションはステイションヌくらいに心掛けてください。また，スラングの使用は極力避けたいのですが，英語の生活で自然に身につくスラングがあるので要注意です。一度私は家内に“I stashed it away”（それをかたずけた）と言って，笑われました。ギャングが盗品を隠したように聞こえたとのこと。“I put it away”と言うべきでした。“stash”はスラングです。

英語の談話という即答に迫られるストレス下では，考えてもいない簡単な誤りがしょっちゅう顔を出します。驚くなかれ，“he”と

“she”の混同，複数と単数の混同，現在形と過去形の混同，自動詞と他動詞の混同，目的語が無い，文章が完了していないなど。これらの誤りは時とともに消えていきます。

日本からの留学生は「話せなくても書くのは上手だ」という一般論ですが，「レポートは水曜まで（by）提出のこと」，「レポートは水曜まで（until, till）受け付ける」の「まで」の使用を混同するなど，日本語では同じでも使い方が違っていたり，日本的な表現の英訳で理解されにくい文を書くなど，安心はできません。さらに，セミナーで発表するときは絶対に書いたものを読まず，大きな声でと注意してきました。学会で書いたものを聴衆に配布して，発表者がそれを読むのでは聴衆を失います。

英語生活の利点は，言葉への慣れと，その先の大きな進歩にあります。日本でも海外でも英語の学会誌に多く論文を出している日本人の英語はとりわけ簡潔で，英語国民が書くよりわかりやすい場合が多いものです。これは投稿論文の幾度もの屈辱的棄却を乗り越え，客観的な英語の表現の鍵を見出した経験による収穫ではないかと思います。日本人は英語が苦手だという先入観を捨て，簡潔な英語をめざしてください。

私事になりますが，私の1980年の英語の著書は編集者が原稿に手を入れてくれましたが，1994年の英書には編集者のコメントが少なく，2007年の英書には編集者の原稿への手入れは全く無く，私が整えた原稿がそのまま本になりました。これが英書出版の一般的傾向らしく，カメラレディを念頭に置く今日の出版界の注意すべき変化で，英語の原稿を執筆する際には，細心のケアが必要です。

私は棄却率の高い計量心理学会の英語の研究誌「サイコメトリカ（*Psychometrika*）」の編集長をしばらく務めました。この学会誌には1960年代に龍岡，久野，柏木の論文と戸田の書評，1970年代には鮫島，西里，高根，鳥居，斉藤の5人の論文しかみられませんでしたが，1980年代からは日本人の論文が急激に増えました。この日本人の英語の世界への羽ばたきが，若い世代に是非受け継がれることを祈っています。

日本への帰還

さて1990年代にOISEはトロント大学に併合され，わが学部MECAは解体し，2000年に，私は定年で名誉教授として退職しました。その後のオンタリオ州の定年退職制度廃止は時すでに遅し，しかし2001年には人生最高の幸運が訪れました。35年前に実現しなかった「日本の大学で教えたい」という私の夢が，関西学院大学の今田，八木，中西，山本，藤原教授やほかの皆様方と，同志社大学の松山，山内，立木，岡市教授などの御厚意で実現し，それは私の人生の花でした。2001年から2007年まで短期の客員教授を務め，日本で親切な多くの皆様に囲まれた毎日の幸せを今も感謝の気持ちで懐かしくかみしめています。ウインザー大学名誉教授小橋川慧氏と会う度に，西宮の客員時代の思い出に花が咲きます。

私の教師としての人生は終わりましたが，正直なところ北大の結城，梅岡，戸田，野沢，高田，大山，竹中，寺西，寺岡，大黒先生や先輩の杉山先生に対しては，自分は今でも依然として未熟な生徒であり，恩師の域までは程遠いと思っています。「君は教養のとき野沢先生の心理学で可を取ったのに，何故心理に来たのか?」というある先生の質問には今でも応えられません。長い海外生活が空白を作った人生で，日本の恩師を想うとき，自分はまだ角帽をかぶって通学した北大生であるような錯覚を覚えます。

（本稿は大山正先生のお勧めと阿部純一先生の御厚意で書きました。両先生に心から感謝いたします。）

文　献

Nishisato, S.（1980）*Analysis of Categorical Data: Dual Scaling and Its Applications*. University of Toronto Press.

Nishisato, S.（1994）*Elements of Dual Scaling: An Introduction to Practical Data Analysis*. Lawrence Erlbaum Associates.

Nishisato, S.（2007）*Multidimensional Nonlinear Descriptive Analysis*. Chapman & Hall/CRC.

読者の声

■いつも楽しくよませていただいております。話の内容が多岐にとみ，日常生活のトピックも心理学的知見から専門家の先生方のコメントが書かれており，学生達も興味深く読んでいます。今後も楽しい紙面を期待しております。（40代 女性）

読者の声　投稿募集中！

『心理学ワールド』への，ご意見・ご感想をお待ちしています。

●送付先　〒101–0051　千代田区神田神保町2–10
（株）新曜社　第一編集部　morimitsu@shin-yo-sha.co.jp

投稿は，お葉書・Eメールどちらでもけっこうです。
世代と性別をあわせてお知らせください。